

イヌザクラにフォーカス

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

サクラと言えば、まずソメイヨシノをあつかうのが普通であろうが、ここではそうではない。しかし、導入としてサクラとは何かの概略を説明する必要がある。桜前線の北上、お花見が人々の関心に上がるが、それは多分に人工的な品種であるソメイヨシノのクローン性に大きく依存している。ソメイヨシノは、オオシマザクラとエドヒガンの交雑種で幕末に江戸染井で成立したと考えられているので、種子繁殖はできず、繁殖はもっぱら接ぎ木であるからである。様々なサクラに興味を持ってきた筆者としては、むしろそれに先立って咲くカンザクラの類、また、それに遅れるサトザクラ系のヤエザクラ、ヒガンザクラの方がより興味がひかれる。2006年4月10日には、小石川植物園で行幸啓を経験したが、その時、他のサクラは花期が過ぎていたが、サトザクラ系の「太白」が満開であったことにはホッとするとともに、改めて強い印象を持った。日本列島に限っても、サクラの種類はあまたあるが、高校時代に、蓼科山の2000m余の山中にひっそりと咲いていたミネザクラは、雨のそぼ降る中であつたこともあるが、深い感銘を受けた。このような関心からは、12月というのに咲き誇る東京大学本郷キャンパスの総合研究博物館裏にあるヒマラヤザクラは、その孤高の華やかさには目をみはらされる(図-1)。同じ時期に咲くジュウガツザクラは各所に見られるが、園芸品種であるこちらの方は花が付くといってもほんのお情け程度でしかないの、それとは大いに対照的である。



図-1 ヒマラヤザクラ 東京大学構内



図-2 イヌザクラ 東京大学小石川植物園

イヌザクラ

あつかおうと思うイヌザクラ (*Prunus bruegeriana* Miq. 図-2) は、和名の意味からすると「似て非なるサクラ」か、あるいは「サクラモドキ」であり、確かにサクラとしてはみずばらしい。小石川植物園に入って坂を上がった直ぐ正面にあるのがイヌザクラで、サクラといってもあたかもライラックの花のごとく房状に花が付き、花の華麗さを楽しむものではない。この仲間には、ウワミズザクラ、バクチノキがあるが、いずれも明治の開国直後の横須賀造船所で働いていてフランス人ミケーリ (Miquel) により種同定されたものである。ただし、それらの幹の太さは十分に大きく、一抱え以上もある。他にも何本か本園内にはあるが、それらも大きな木であり、大きな特徴であると言えよう。

このイヌザクラに思いがけないところで出会った。それは長野県茅野市高部の諏訪神社上社前宮のやや奥の「峯の湛」を訪問したときである。まずは、なぜそこに行ったかを述べる必要があるが、諏訪神社には上社、下社があり、この前宮は上社の本宮に対する前宮であるが、この出雲系の古代祭祀の系統にある神社は自然信仰を宗教形態とするので、実はこの前宮の方が本源の祭祀場所であるようである。事実、歴史的にも本宮は後に設けられたことが知られている。そこでは、後ろに控える守屋山を崇めていると伺おうと、こちらの方がより原初の姿であることが理解できる。奈良県の三輪神社が、その奥の三輪山を磐座とし、聖なる存在としているのと同じ系統にある。前宮を訪れたのは、2018年11月であつたが、質素な神社には周辺も含めて筆者の他に誰も見当たらなかった。近くの案内板によると、その裏奥に「峰の湛」があり、そこを巡る山道は鎌倉道と書いてあるではないか。すっかり気に入って、右の方へ入って登っていくと、



図-3 峯の湛のイヌザクラ
根元に小祠がある



図-4 干沢城址

300mも登ったところで尾根筋に達し、そこに大きな木がありそれが「峰の湛」であった。これが実にイヌザクラであった(図-3)。大きな幹が倒れた形跡があり、枝も折れた気配があるが、手入れされている様子は少ない。なお、ここで何故「峰の湛」に拘るかも述べる必要があるだろう。

諏訪地方には、「七木湛^{たたえ}」があり、それは7本の崇めるべき木という意味であるが、湛は、祟りでもあり、憑代^{よりしろ}であり、トーテムともいえよう。そのうちの4本はかつて訪れたことがあるが、いずれももうそこには目立った樹木はないので、失われてしまったのであろう。名前からすると、ヤナギ、ヒノキ、サクラ、トチノキであるが、いずれも神社になっているが、その境内にはそれらしき木は見当たらない。その他には、マユミもあるが、これは今後訪問することにしよう。そして、今回「峯の湛」であるが、これが「七木湛」の第一番目であり、それがイヌザクラであったのである。上社が狩猟神であることは、すぐ近くの神長官資料館で辿ることができる。その狩猟神である諏訪神社上社の神事として、御射山^{みさやま}神社の行事は重要な祭りで、それらの樹木を巡行して、催事である穂屋祭りへ向かうとのことであり、時期は丁度秋へ向かう時期である。その第一号が峰の湛で、それゆえに今に残ったのであろう。これはまた、いわゆる御社口^{みしゃぐち}巡行でもあり、古代祭祀の姿が彷彿と浮かんでくる。ミシャグチと言え、シダにオシャグチデングというのがあり、牧野富太郎博士により木曾で発見されたものであるが、その由来は、牧野博士が木曾で発見したが、神社の境内で、それでオシャグチデングとなったと説明されている(前川 1981)。従って、これは、図らずもミシャグチ信仰が、この地方に広域に存在していることを示していよう。実際ものの本によると、御社口信仰は、諏訪神社の信仰域に固有のもので、伊那谷、木曾にも、山梨県などにも広がっていったと理解されている。従って、御射山への巡行は、まさにいわゆる「ミシャグチ」のトーテムの巡行に他ならないであろう。なお、たまたま知ったことであるが、下社は春宮、秋宮からなるが、その神域の人の目に付かないところに、ひっそりと杉とイチイが植えられている。

これは神社を訪問しても全く目立たないところであるが、これはそれらの木が依り代であると言っているのであろう(西住井 1999)。

とすると、その第一号のイヌザクラであるべき意味も探る必要があるが、あるとすればその堂々とした巨大さであろう。そこから北東へ30km行くと、山梨県北杜市の「山高神代桜」もあるわけであるが、こちらはいわゆる甲斐の「武川衆」の故郷であり、こちらでは1000年以來サクラの花を愛でたのであろうが、こちらのイヌザクラはそのどっしりとした姿に古代人は神を感じたのであろうと思うが、その意義を論じた論考は見当たらない。今はそれ以上に議論を深めることはできないが、識者にその意味を尋ねたいと思っている。

なお、そこは鎌倉道に沿っていると書いたが、我々の知る「いざ鎌倉」の道はもっと機動性を感じられるものであり、武人が馬で馳せ参ずることを想像させるが、この道はそうではない。これはいかにも細道であり、山の斜面をぬう山道であり、人ひとりが歩けるだけである。しかもその延長を辿っていくと、鎌倉期に遡る古城址干沢城(図-4)を巡っていたが、そこは中世の山城の姿をよくとどめており、城址に入るとそこには、人は「石樽を持ち込んで、そのケルンに載せるべし」とあることは、中世の石投げ合戦を彷彿する出来事であった。空堀、二の丸、三の丸も記されており、底知れぬロマンを掻き立てられたが、実にその姿はよく保存されていた。ただし、幾分その気が削がれるのは、中心に送電線用の鉄塔があることであった。筆者の興味を綴ったが、読まれた方には、一度本当かどうか確かめていただきたい。

ここで伝えたいことは、サクラは花を愛でるといのは、日本人には常識かとも思われるが、決してそれだけでなく、その堂々とした姿を貴ぶ伝統があることが目にとどまればと思う。3018字

文献

- 前川文夫 1981. 植物の名前の話, 八坂書房.
西角井正慶 1967. 古代祭祀と文学, 中央公論.